

Art Collectors' [Art Collectors' 賞]

ユアサエボシ

戦前生まれの架空の三流画家「ユアサエボシ」として制作しているユアサエボシ。どこか懐かしさがありながら、トリミングの取り方に独自のセンスがある。今回購入した作品は少し前に制作されたコラージュであるという。今のペインティングにも通じる要素があり、創作の原点を感じさせる。

アートのある暮らし協会 [ALSA 大賞]

副島しのぶ

感情を持ち、涙を流すのは人間だけとばかり思っていましたので驚きました。単純に、リアルすぎてか、私の気持ちと同化し、心が動きました。人間という生き物を、ものすごく研究されていることと思います。新分野の発見！！アートの世界でどのように活躍していくのか楽しみです。頑張ってください！同郷ということで、心から応援しています！！

ART BASE 88(宮本初音) [ART BASE 88(宮本初音)賞]

犬和紙

勢いがあつてヨイと思いました。たくさん挑戦してほしいです。

稻葉智子 [稻葉智子賞]

飛田正浩

来場者と作家が会話をする。そこで生じるリズムやフィーリング、話の内容を作家は全て受け止める。そして、作家はその人のために言葉を選び、その言葉をその人の衣服にプリントする。楽しく雑談しているだけのように思えて、いつの間にか作家の行為に巻き込まれている。自分を少しだけ晒してみることも、他者の行為に巻き込まれることにも、思ったより抵抗がない。それは、飛田正浩さんの人柄に由来する部分も大きいだろうし、常々「楽しいこと」として捉えている「ファッショニ」を介しているからかもしれない。贈られた言葉は、その人のステイトメントになり、それを着て歩くことはバフォーマンスだ。言葉を衣服にプリントするという行為が、新たな行為を生みだしている。飛田さんは、そうして街の景色を変える。

岩垂なつき [イワダレ賞]

堀内悠希

堀内さんは日常の中でこぼれ落ちてしまうボエーのかけらを拾い集めてくれる作家である。波間の連なる様子が歪んだボーダーのように見えるという一瞬の目の錯覚。それは多くの人がふと思いついたとしても、取るに足らないものとして、頭の中から消し去ってしまう。しかし、それは本当に「取るに足らない」ものなのだろうか。もしかしたら享受すべき世界の美しさは、そこにこそあるのではないだろうか。私はこの気づきを心に留めておくために、作品を購入し、これからも眺め続けることにした。

エミリー・マクドウェル [EM賞]

Fernanda Feher

フェルナンダ・フェヘルのペインティングは、どんな舞台であっても必ず彼女の独特な世界として映し出される。「フェルナンダビジョン」とも呼べるのではないか。今回購入した「Up in the Upperwest」は、高速ビルをまるでジャングルのように渡り登るワイルドな女の子を見つめるニューヨークで、それは実際にフェルナンダが過去にとったボラロイド写真が溶け込む風景となっている。遊び心やファンタジーと一緒に、記憶やノスタルジーを通してアーティストと親密な関係を築ける作品であり、私は見るたびに喜びを感じる。

太下義之 [太下賞]

小川武

小川武氏の名前はアート業界ではまだあまり知られていないかもしれない。彼の作品は、観葉植物をモノトーンの写真に撮り、それをシルクスクリーンでポスター仕立てにしたものである。たとえば、真夜中の温室にて、眠っていた植物たちの不意を突いてフラッシュを焚き、植物たちが驚いているシリエットをプリントしたかのような作品たち。それらの作品には、まるでインディーズのロックバンドのCDジャケットのように、斬新さと渋みが同居している。

小野道生 [小野道生賞]

堀内悠希

どちらかと言えば陰りのある気配をまとった青を基調としたグラデーションがとてもすてきでした。作品の中にタイトルがはっきりと書き込まれていますが、それにも関わらず（あるいはそぞらだからこそ）、絵の全体から受ける印象はそう簡単にはくっくりとしてこなくて、絵とタイトルが近づいたり遠ざかったりしながら、観ている僕とも近づいたり遠ざかったりしながら、そうしているうちに水彩のじみのようにじわじわと沁み込んでいました。入り江に面した高台から眺める海面のように見飽きませんでした。

和島ひかり

黒いスクリーンに描き出されるシンプルで素朴であたたかみのあるアニメーション。思わず足を止めて観続けてしまいました。惹き込まれました。言葉にならない／できないけれど確かに自分の内に起こっている感情の流れや息吹が託されたART（あるいはHEART）からは、やさしさや誠実さやちょっぴり不器用な感じと同時に簡単には折れない芯の強さを感じます。ループされる作品から柔らかく放たれたそのバイブルに浸っているうちに、自分の心が落ち着きと清らかさを取り戻していくのを感じました。

株式会社丹青ディスプレイ [丹青ディスプレイ賞]

やなぎさわひろ

川村喜久 [川村文化芸術振興財団賞]

岩崎貴宏

平野真美

木村博之 [木村博之賞]

ユアサエボシ

『ユアサエボシ』の作品とユアサエボシの作品が交錯し、また解かれ生きる時代は違えども、時代を紡ぐその制作過程は、他我を見つめ直すキッカケになるかと存ずる。彼方の作品に魅かれたのはその背景に勿論、異を唱えるつもりは毛頭なし、さらに云うならば享楽的とし、フイクションとも捉えられる物語を制作の一部とする貴方を心より尊敬しております。

貴方の作品に生涯で出会え、感動したこの時を決して忘れません。

小池一子 [小池一子賞]

宇平剛史

アーティストは光を読む人である。光の表情に色彩を読む人でもある。『Skin』のモノクロームに相対して私はとっさにそう思った。フェアの会場で私の傍にはドイツで活躍するミニマル・アートの作家がいて、吸いよせられるように二人で宇平のモノクローム作品の前で立ち止まってしまった。私たちはなぜこんなにもモノクロームの表現に惹きつけられるのか。宇平の作品は人の肌を主題にした連作で、見る者はひたすら肌が湛える光の表情に対峙するしかない。黒い肌を撮っていれば表面は黒である。だがそれは黒から白への光のディグリーを感じさせる層をなした色彩の海もあるのだ。美術史の中のモノクロームの大河へ、ようこそ。そのような発見の喜びを私は今回のアートフェアで体験した。